

西富の屏風

八柳 修之

小田急百貨店が湘南ゲートと改装され市民図書館が入ったので便利になった。「藤沢の文学」（北沢瑞史著 名著出版）という面白そうな本を見つけ読んだ。最初に藤沢つながりで出て来た地名は「更級日記」（平安時代 康平元年頃・1058）の中ににしとみの屏風があるという記述であった。

にしとみといふところの山、絵よくかきたらむ屏風をならべたらむやうなり。かたつ方は海、浜のさまも、よせかへる浪のけしきも、いめじうおもしろし。



広重 東海道五十三次藤沢宿



境川奥田橋付近から見た駒立山

この文の「にしとみ」とは現在の藤沢市西富である。西富の屏風を描いた絵は、広重の東海道五十三次藤沢宿に見られる。江ノ島一の鳥居付近から見た風景、背景の小山は遊行寺である。この浮世絵は1832年～33年頃に描かれたもので、菅原孝標の女（むすめ）が訪れたころ遊行寺はなかった。背後の小山、件の西富の屏風は随分とデホルメされている。絵に描かれたような屏風を並べたような山、片方は海という描写は、当時はまだ障害物がなかったとしても、現在の藤沢橋辺りから見る限り想像できない。さらなる疑問は、「かたつ方は海、浜のさまも、よせかへる浪のけしきも、いめじうおもしろし」である。境川が潮の干満の影響を受ける干潮河川であったとしても、西富からは海や浜の様子は見られない。それはさておき、どんな道を辿って菅原の孝標の女は西富へやって来たのであろうかウォーカーとしては興味のあるところである。

「更級日記」の作者は菅原孝標の女（たかすえのむすめ）は、寛仁元年4年（1017）、に父が上総介に任ぜられて東国に下った。寛仁4年（1017）、13歳の時、父の任期が終り帰京した。9月3日に上総国府（千葉県市原市）を出発し、下総・武蔵を経て相模に至り、12月2日に都に到着している。この日記は当時書かれたものではなく、作者が晩年の52～53歳のころ、少女時代の旅行の思い出を記したとされているので記憶違いもあろうとされている。

藤沢という地名が初めて登場するのは、「太平記」（建徳2年頃・1371）の巻十、鎌倉合戦で、300年もの後である。「村岡、藤沢、腰越、十間坂、五十余箇所火をかけたししかば、武士東西に馳せ違ひ、貴賤山野に逃げ迷う」。この場面は、正慶2年（1333、新田義貞が軍勢を率いて、鎌倉の北条氏を攻めのぼる場面である。更級日記の頃には藤沢という地名は存在しなかった。

「神奈川県史通史1」（1981）竹内理三監修に「想定さらしな日記道程」という地図（末尾掲載）がある。ルートの説明がないが、図を見る限りこのルートは境川と交差しており、西富を歩いたことは想像できる。

